メタメッセージと母語話者・非母語話者の談話行動

熊取谷 哲夫（城西国際大学）
KUMATORIDANI Tetsuo

0．はじめに

およそどの発話でも、それが発せられる限り、文字通りの内容以上のものを伝達する。ここではBateson（1972）の概念を用いて、このような命題内容以上に伝達されるメッセージ、特に発話意図に関わるものを「メタメッセージ（metamessage）」と呼ぶことにする。（ここでいうメタメッセージのあるものは、Tannen（1979）などが言う“frame”と類似の概念である。）

本発表では、(1)メタメッセージの主要なものとしてどのようなものを考えればよいか、(2)本研究で「言語使用状況特定化のメタメッセージ」と呼ぶものに焦点を当て、メタメッセージと母語話者及び非母語話者の談話行動を考える。

1．メタメッセージとは

メタメッセージは上述のように、発話の命題内容がどのような意図の元で発せられたかを伝達するメッセージと捉えられているが、この考えに従えば、いわゆる発話の機能と称されるものすべてがメタメッセージに該当することになる。このことからも容易に想像がつくようにメタメッセージは多種多様であり単一の次元で整理することは極めて困難だと言えよう。更に、メタメッセージは、文脈依存性が高いばかりでなく、文脈を作り上げる役割をも果たす。ここではまず、メタメッセージの主なものとして下の2種類をあげることにする。但し、下の分類は相互排除的でなく、通常同時に生じるものであるということを注意しておきたい。

(1)発話行為遂行意図に関わるメタメッセージ

a）発語内行為とメタメッセージ：いわゆる間接発話行為がこれに相当する。例えば、状況によっては「この部屋暑いですね」と発話することにより「窓を開けてほしい」或いは「窓を開けて下さい」というメタメッセージを伝達することが可能である。

b）発語媒介意図とメタメッセージ：我々は、発語内行為を遂行するとき、特定発語媒介効果を期待して遂行することが少なくない。更に、この発語内行為の遂行時に発話媒介意図を聞き手に明らかにしようとすることがある。このような場合、当該発語内行為の遂行が特定発語媒介意図をメタメッセージとして伝達していると見ることができる。例えば、詫びという発語内行為は、通常、「放免されたい」という発語媒介意図の元に遂行され、詫びの遂行は、この発語媒介意図が慣習的に包含されている（熊取谷、1989）。従って、詫びの遂行が「放免請求」というメタメッセージを伝達していると考えることができる。（「ごめんなさい」は、この発語媒介意図が直接表現されたものと考えられる。）

発語媒介意図に起因するメタメッセージは、単一の発話に限定されたわけではない。い

わゆる「会話の含意」(Grice、1975) によって伝達されるメッセージもこれに含まれよう。

(2)言語使用状況特定化のメタメッセージ

発話行為遂行意図に関わるメタメッセージが、発話が持つ命題内容に密接な関係を持つのに対して、ここでいう「言語使用状況特定化のメタメッセージ」は、発話がどのような調子でなされたかによって伝達されるメッセージを指す。これは、人間関係を規定するものと、状況を規定するものの二つに大別できる。

a) 対人関係規定のメタメッセージ

発話はその内容の伝達と同時に、発話者自身について、あるいは発話者が聞き手との関係をどのようにとらえているかを伝える。ここでは、このようなメタメッセージを「対人関係規定のメタメッセージ」と呼ぶことにする。例えば、特定地域方言を使用すれば「その地域出身者」という話者に関わるメタメッセージを伝えることになる。

b) 状況規定のメタメッセージ

発話はまた、現行場面、あるいは後続する場面がどのような性質のものかを規定する力も持っている。ここでは、このようなメタメッセージを「状況規定のメタメッセージ」と呼ぶことにする。例えば、あるい発話が特定の伝達事象 (communicative event) が後続することをマークする機能を持つ。例えば、英語では、"Have you heard this?" が後続する発話状が "joke" であることを示すことが多い (Saville-Troike、1982)。このような場合、当該発話は「joke が後続する」という状況規定のメタメッセージを伝達していることになる。

以下、言語使用状況特定化のメタメッセージに焦点を当て、母語話者・非母語話者の談話行動について考える。

2. 副次言語と言語使用状況特定化のメタメッセージ

言語使用状況特定化のメタメッセージの典型的な例として Gumperz (1982) がいう「文脈化の合図」(contextualization cue) を挙げることができる。当然、日本語にもこのような副次言語的手段による言語使用状況特定化のメタメッセージ伝達が存在する。例えば、特に男性の日本語話者が特定状況で発話に先行して「すー」という吸引音を使用することがあるが、この吸引音が「文脈化の合図」として機能すると考えられる。パイロットスタディの結果によると、当該吸引音を含む発話は、含まないものに比べて「かしこまり」「丁寧」「控えめ」の度合い (特に「かしこまり」) が高いと母語話者に判定された。(調査方法は、language attitude などの研究で用いられる speech-disguise という方法を用いた。即ち、単一の文を同一人物が当該音を含んで発話したものと当該音を含まずに発話したものを収録し、これを母語話者に聞かせ、その印象をかしこまり、丁寧、控えめの度合いを SD 法により測定した。) 被験者数が15名であったため断定的なことは言えないが、ここに現れた結果は母語話者の直感とはかけ離れたものではないように思われる。この結果が妥当なものであれば、日本語母語話者が当該吸引音を使用する時、聞き手はそれは発話者が当該状況を「かしこまった場面」と把握していると考えることが出来る。即ち、当該吸引音が言語使用状況が「かしこまった場面」であるというメタメッセージを伝達し、聞き手もまた、そのように解釈しているのであろう。

3．スタイル・シフト、コード・スイッチと言語使用状況特定化のメタメッセージ

スタイルシフトやコードスイッチングについては多くの研究がなされてきた。例えば、Rubin（1968）によると、スペイン語とガラニー語の選択を決定する重要な要因は、相互作用が起こる場所であるという。また、Blom and Gumperz（1972）によるコードスイッチングの研究においても、場所や、「かしこまり」（formality）などが要因となっていることが明らかになっている。これらの研究結果をメタメッセージの視点からとらえ直すと、次のようなことが言えよう。即ち、当該シフトやスイッチは、話者が言語使用の状況を特定化するというメタメッセージを伝達していることになる。

同様のことが日本語における敬語使用（あるいは丁寧行動全般）についても言える。話者が普通体から丁寧体へスタイルをシフトした場合、次のようなメタメッセージの伝達が生起することを想定してよいとすることが可能であろう。

敬語使用によるメタメッセージ

対人関係規定のメタメッセージ

「あなたとの間に距離を置きたい（現時点で、あなたを「ウチ」扱いしない）」

状況規定のメタメッセージ

「私は現在の言語使用状況をかしこまった場面であると捉えている」

因みに、最近の研究では、言語による丁寧行動を律する要因として、（例えば、Brown and Levinson（1987）に見られるように）相手の自尊心の尊重と見るだけでなく、発話の場面との関係で自分あるいは相手をどのように捉えているかという発話者の認知に関わる概念が重要であることが明らかにされている。特に、日本語（文化）では、ウチ、ソト、ヨソ、の概念が言語による丁寧行動を律する要因として重要であることが指摘されている。（井手　1977、1986）例えば、日本語においてはソト関係にある人間に対する言語的丁寧行動には大きな注意を払うが、ヨソ関係にある人間には過度に丁寧であったり、過度にぞんざいであったりすることがある。

このような対人関係の規定は、言語行動だけでなく、非言語行動においても行われる。例えば、気配りを重視する日本人が、電車の中などで気配りにかける行動を取ることが見受けられるのを不思議に思うという指摘が非母語話者からなされることがあるが、これは周りの人間をヨソ関係にあると規定した結果生じた行動である。

更にもう一つの例をあげれば、日本語文化におけるこのような3層の人間関係規定は、相互作用の場面において参加者が置く距離にも影響を与える。人間関係の親疎や場面のかしこまりの度合いにより話し手と聞き手とのあいだの物理的距離が異なる。周知のように、かしこまりの度合いが低い場面で、親しい人同士が話しをするときの距離は、そうでないそれよりも相対的に距離が長い。筆者の観察によれば、日本語文化において特徴的なことは、ウチ、ソト関係にある人との相互作用においては距離のルールが遵守される傾向が強いが、ヨソ関係にある人物に対しては距離に対する配慮が極端に欠けることも多いという点である。

以上のことは、とりもなおさず、言語行動あるいは伝達行動全般において、発話者が相手、発話の場面、会話参加者などをどのように把握しているかを示すメタメッセージを伝達していることを示していると見ることができよう。

4．非母語話者のメタメッセージ解釈の問題

非母語話者が日本語を使用する場合、言語形式とその命題内容的意味を正しく使用できなければならないのは勿論のことであるが、それに加えて、当該言語形式が談話の中でどのようなメタメッセージを伝達し得るかの知識を持たなければ、発話の意図を適切に解釈することが不可能となる。Gumperz（1982）の研究が明らかにしたように、微妙な「文脈化の合図」を正しく解釈できなかったため、深刻な異文化間コミュニケーション上の問題が生じることもある。

更に、同一状況でも、言語文化によりその把握の仕方に相違が生じることも多い。例えば、熊取谷（1982）で示したように、テレビコマーシャルという伝達状況は日米によりその把握の仕方に違いがある。即ち、日米のテレビコマーシャルの情報構造を分析すると、アメリカのテレビコマーシャルの方が日本のコマーシャルよりも立論度の高い情報提示パターンを用いる傾向があることが明らかにされている。この現象は、アメリカ文化においてはコマーシャルを「明快さの方略」が優先されるディスコースと認識され、日本文化ではコマーシャルを「調和の方略」が優先されるディスコースとして認識されるからであると考えることが出来る。このような差異は、同一事象における「起こり得ること」あるいは「起こりやすいこと」に対する予測が言語文化により異なることを示すものといえよう。即ち、テレビコマーシャルという伝達状況そのものが、その中で生じる発話がどのように解釈されるべきか、どのような発話が生起し易いかを示すメタメッセージを伝達していることになるのである。

このように、同一・類似伝達状況が文化により異なるメタメッセージを伝達することから、異文化間コミュニケーション時に特定メタメッセージあるいは発話全体の解釈にズレが生じることが予測できる。例えば、上に見た日本語の吸引音の場合では、当該音が状況を規定するというメタメッセージを伝達していることに気づかなければ、後続する発話を適切に解釈することが困難となろう。

また、Kumatoridani & Quackenbush（1990）で示したように、日本語話者が相手に丁寧な気持ちを込めて発音した文はそのように気持ちを込めずに発音したものより速度が遅く（特に発話の始め）、ピッチ・レンジが狭いという副次言語的特徴を持っているが、このような発話を日本語母語話者（日本人大学生46名）と日本語学習者（オーストラリア在住の大学生117名）に聞き取らせたところ、母語話者が「丁寧な気持ちを込めて発話している」という発話態度を正確に認知したのに対して、日本語学習者は必ずしも正確には認知することができなかった（細田他（1990））。この結果をメタメッセージの伝達から見ると、非母語話者は使用状況を規定する副次言語的メタメッセージの解釈を正確に行うことができなかったということになろう。

更に、具体的な例として、電話会話の終結におけるメタメッセージ解釈の問題を挙げることができる。エスノメソドロジーが明らかにしたように、電話会話は典型的に前段終結（pre-closing）を経て終結へ向かう。例えば、日本語では熊取谷（1993）で示したように、日本語の前段終結では、「じゃ」（及びその類）や「はい」（及びその類）が頻出し、両者は単に先導発話を形成したり、

先行発話に対して応答することにより隣接対を完成させるだけでなく、新たなトピックを導入する意志はなく、会話を終結させたいという意向を持っていることを示す会話構成上の重要なメタメッセージを伝える役割を果たしている。具体的な例を見てみよう。

(1)

1 A：また電話してよ。
→2 B：うん、分かった。また遊ぼうよ。
→3 A：うん、じゃね。
4 B：はーい。バイバイ。

(2)

1 A：ほんじゃね。
2 B：うん。
3 A：ほんじゃね。
4 B：うん。
5 A：ありがとね。
→6 B：うん、
バイバイ。
7 A：バイバイ。
8 B：またね、
バイバイ。
9 A：バイバイ。

(3)

a. 1 A：うん。
2 B：よっしゃ。
3 A：じゃ。
4 B：うん。

b. 1 A：いやー、どうしよるんかと思って。
2 B：うん、もうだいぶえんよ。
3 A：それならよいよい。
ほんじゃな。
4 B：うん。

(1)(2)(3)からも明らかなように、電話会話の終結部分のデータを収集すると「じゃ」や「はい」や「うん」やこれに類似する表現が頻出する。すでに述べたように、会話の終結部においては、典型的には新しい話題が導入されない旨の同意・確認、会話が終了してもよい旨の同意・確認な

どの作業を行う「前段終結」を経て、「失礼します」「さよなら」などの「最終発話交換」が行われる。「前段終結」においては、次のような発話が典型的に生起する。

前段終結に生起する発話
(a)先行会話のまとめ
(b)会話を終了しなければならない理由の説明
(c)喜びの表明
(d)関係維持の意志表示

これらのやり取りのそれぞれにおいて、(a)先行会話のまとめに対する同意、(b)会話終了理由の受け入れ、(c)喜び表明の受け入れ・同意、(d)関係維持の意志表示の受け入れ・同意が行われることになるが、このような「受け入れ」「同意」の意志表示として「はい」およびこれに類する表現が用いられる。更に、会話終結部における「じゃ」は、前段終結あるいは最終発話交換への移行の意志表示を示す談話標識（discourse marker）として機能している。(2)では、同じ内容の隣接対が複数現れており、前段終結が終結への合意を形成する活動であることを如実に物語っているが、ここでは２Ｂと３Ａの「うん」がそれぞれ先行の「ほんじゃ」という移行意志を表示する標識に向けられており、移行への同意となっている。また４Ｂの「うん」は、応答対象が存在していないで用いられているが、これも先行発話交換でなされた移行確認に対する合意の意志表示と見ることができよう。更に、（３ａ、３ｂ）にあるように、このような移行受け入れの発話が最終発話となることも珍しくない。

以上から分かるに、終結部に頻出する「はい」及び類似表現はつぎのような機能を持っていると考えてよいであろう。

終結部に頻出する「はい」が持つ談話構成上の機能
(a)隣接対を完結させ、
(b)これにより話題を終結させ、
(c)これにより談話内の移行場を作り出し、
(d)これにより談話を終結にむける。

このような「はい」が持つ機能をメタメッセージの視点から捉えると、この場合の「はい」は、談話を終結に向けることに同意しているというメタメッセージを伝達しているとみることができよう。

ところで、非母語話者は、終結部において「はい」をどのように使用しているのであろうか。日本語非母語話者は、かなりの上級者でも、この「じゃ」や「はい」を単に隣接対完成の対象としてのみとらえ、会話終結への意志表示と解釈できないことが少なからずある。岡本、吉野（1994）は、以下の好例をあげている。

(4)

1C：合わせていっしょに見ていただきたいんですね
2R：あー
3C：はい
4R：はい
5C：え、ですからその二つをあのお待ちしますので
6R：はい
7C：よろしくお願いいたします。
8R：こちらこそ
9C：はい｛笑い｝それはあしたの、ま、夜になるとおもいますけど ┌はい
10R：はい └はい
11C：以上です
12R：はい
13C：┌はい、どうも失礼いたします
14R：└失礼しまーす

（岡本、吉野（1994）より）

(4)の会話が生じた状況以下の通りである。

日本語母語話者Cが手直しをした英語の原稿の出来映えをみてもらうために非母語話者（アメリカ人）Rのところに明日の夜原稿を持って行き見てもらいたい旨依頼し、会話を終結しようとしている。

1Cにおいて、母語話者は依頼の受け入れと前段終結への移行を意図したようであるが、これに対して非母語話者は2Rで「あー」を用いて応対している。これだけでは相手の依頼を受け入れたことにならないだけでなく、前段終結への移行を同意したことにもならない。母語話者であれば承諾と前段終結の受け入れの両方を表す「あーわかりました」とでも言うところであろう。

承諾と前段終結の受け入れを得られなかった母語話者は、4Rの「はい」を発することにより、相手の承諾をまつことになるが、非母語話者が依然として期待した言語行動を取らないため、再度状況の説明を行っている（5Cの「ですから」）。非母語話者は、これを先行会話に関係した依頼とは理解できず、これに応答するだけである。（これにより、局部的には隣接対を完成させたことになる。）

母語話者は、7Cにおいて明確な形で再度依頼を行い、前段終結の導入を図ろうとする。しかしながら、非母語話者は依然としてこの意図（メタメッセージ）を理解できず、8Rにおいて隣接対を完成させる発話を行うのみで、自ら前段終結の導入を行うこともしていない。

母語話者は、9Cにおいて、苦笑しながら、より明確な形で再度前段終結の導入を計ろうとするが、非母語話者は10Rにおいて隣接対の完成を行うのみである。

母語話者は、11Cにおいて「以上です」という表現を用いて、一層明確な形で前段終結の導入

を行っている。勿論通常の母語話者間の会話においては、上掲のようなコンテキストでは、このような表現は用いられない。(従って、11Cは foreigner talk の一例と言えよう。)

明確な前段終結導入にもかかわらず、非母語話者は以前として隣接対完結の「はい」を使用するのみである。そこで母語話者は、12Rにおいてこの「はい」を前段階終結の受け入れ・同意と解釈したことを示す、同意の「はい」を使用し、最終発話交換へと(ほぼむりやりに)明示的に移行することになる。非母語話者は、これに応答することにより最終発話交換の隣接対を完成させる挨拶を行っている。

(4)の場合のように、非母語話者が、終結部における「はい」を隣接対の完成という談話のローカルな制御の問題として扱い、会話終結というグローバルな制御として把握していないという現象は、「はい」が持つ状況特定化のメタメッセージを適切に解釈することができなかったからだと言えよう。

5. おわりに

以上、メタメッセージ、特に言語使用状況特定化のメタメッセージおよび、非母語話者が持つメタメッセージ解釈上の問題を考えてきた。以上の議論から、非母語話者が適切な談話行動を取るようになるためには、発話が持つメタメッセージの正しい解釈が必要であることが明らかであろう。メタメッセージの適切な伝達・解釈がいわゆる「伝達能力」の重要な部分を占めているのである(Gumperz 1982)。

本研究は、オーストラリア、Monash 大学に客員教授として招聘された機会にまとめたものである。機会を与えて下さった Monash 大学 Department of Japanese Studies に記して謝したい。

参考文献

Bateson, Gregory. 1972. *Steps to an Ecology of Mind.* New York: Chandler.

Blom, J-p, and J. Gumperz. 1972. "Social Meaning in Linguistic Structure: Code-switching in Norway." In Gumperz and Hymes eds., *Directions in sociolinguistics: The Ethnography of Communication.* New York: Holt, Rinehart and Winston.

Grice, H. P. 1975. "Logic and Conversation." In P. Cole and J. Morgan (eds), *Speech Acts* (Syntax and Semantics, Volume 3), New York: Academic Press, 41-58.

Gumperz, John. 1982. The linguistic bases of communicative competence. In Tannen ed. *Analyzing Discourse: Text and Talk. Georgetown University Round Table on Languages and Linguisiics* 1981, Georgetown University Press, Washington D. C., 323-334.

Gumperz, John. 1983. "The sociolinguistics of interpersonal communication," in *Discourse Strategies.* Cambridge: Cambridge University Press.

細田和雅、カッケンブッシュ寛子、熊取谷哲夫、水町伊佐男、深田昭三　1990。「日本語音声の知覚診断・訓練プログラムの作成」『日本語音声における韻律的特徴の実体とその教育に関する総合的研究、研究成果中間報告書1990』平成2年度科学研究費補助金重点領域研究(1)119-123

井手祥子。1977。「英語敬語の理解と翻訳」『英語文学世界』1月号英潮社

井手祥子。1986。『日本人とアメリカ人の敬語行動』南雲堂

熊取谷哲夫。1988。「発話行為理論と談話行動から見た日本語の詫びと感謝」『教育学部紀要第2部』広島大学教育学部

熊取谷哲夫。1989。「日米コマーシャルに見る説得行動」『日本語教育』67号、72-86、日本語教育学会

熊取谷哲夫。1992。「電話会話の開始と終結における「はい」と「もしもし」と「じゃ」の談話分析」『日本語学』9月号、14-25、明治書院

Kumatoridani, Tetsuo and Hiroko Quackenbush. 1991. "Prosodic Features of Polite Utterances in Japanese and English-speaking Learners of Japanese." *Proceedings of the Eighth Biennial Conference of Japanese Studies Association of Australia,* Vol. 3, 119-122.

岡本能里、吉野文。1994。「電話会話の中間言語分析」第二言語習得研究会における口頭発表

Rubin, Joan. 1968. *National Bilingualism in Paraguay.* The Hague: Mouton.

Saville-Troike. 1983. *Ethnography of Communication: An Introduction.* New York: Basil Blackwell.

Tannen, Deborah. 1979. "What's in a Frame? Surface Evidence for Underlying Expectations." Freedle, Roy, ed., *New Directions in Discourse Processing.* Norwood, N. J.: Ablex.